論文

保育者養成校に在籍する学生の在籍年数の差異が保育者効力感・運動有能感及び運動遊びのレパートリーの出現率に及ぼす影響

菊　池　理　恵

1. はじめに

本研究の目的は、保育者養成校に在籍する学生の在籍年数の差異が保育者効力感・運動有能感及び運動遊びのレパートリーの出現率に及ぼす影響について明らかにすることである。

幼児期の子どもたちの運動能力低下が問題視され、2012 年に文部科学省は、「幼児期運動指針（以下，指針）」を発行した。指針の中では、幼児の運動発達の特性として「動きの多様化」と「動きの洗練化」としている。つまり、幼児は様々な運動遊びを経験し、繰り返して行うことで、時々刻々と変化する環境に適した動きを身につけることになる。また、穐丸・三井（1998）によると、幼児の体力と運動能力の 1986 年と 1996 年の差異を比較した結果、体格差はないものの体力の低下が著しいことから、日常的に保育者の積極的に働きかけが重要であることを示唆している。これらのことから、子どもたちの発達を促すためにも、運動の質と量の確保することが求められており、さらに、そこに関わる人的要因の一部である保育者の存在が重要な役割をしめていると思われる。

では、保育者は、子どもたちの運動発達を促すために、いかなる資質を必要とするのだろうか。その点に関して、砥堀ら（1996）によると、子どもたちの発育発達に応じ、個々の活動を大切しながら行動力を高める指導が必要としている。さらに、運動好きな子どもを育てるには、保育者自身が運動遊びの種類を増やし、遊びやすい環境作りを工夫することや、幼児の運動量の確保のためには、保育者の意図が必要となることが明らかとされている（居崎，2008;細川，2014)。また、保育者自身の保育者効力感を向上させること（西坂，2002）や運動に対して、苦手意識をもった保育者は自己のクラスに在籍する子どもたちへ運動遊びを意欲的に推進しないことで、その子どもたちの運動能力低下の要因になっていることを明らかとしている（杉原ら，2004)。このことから保育者は、自己の運動に対する自信をもつことも重要となってくる。

以上のことから、子どもたちの運動発達を促すための保育者の資質として、保育者の子

どもたちに関する発育・発達に関する専門的知識を向上させることや、運動遊びのレパートリーを増やすこと、保育者効力感や自己の運動有能感を向上させることはとても重要なことであると思われる。このことは保育者を志す学生の課題とも言える。なぜならば、前述で記載した資質については、できるだけ早い段階から身につけ向上させ、幼児教育・保育現場へ就職することが望ましいと思われるからである。しかしながら、そのような研究は見当たらない。また、養成校に在籍する学生にとって、専門的知識としての日々の学びや実践知（実習など）を習得することと運動のレパートリーの増減や保育者効力感や自己の運動有能感へ影響を及ぼすことについても検討された研究は見当たらない。

そこで、本研究は、保育者養成校に在籍する学生を対象に以上のことについて明らかとすることを目的とした。なお、本研究では、次のことを仮説として立てた。参加対象者は保育者養成短期大学に在籍する１年生と２年生とする。そして、１年次と２年次の運動レパートリーと保育者効力感と自己の運動有能感について比較検討する。なぜならば、１年生よりも２年生の方が、専門的知識と実践知（実習など）の習得や経験が豊かだからである。先行研究でも挙げられていた通り、専門的知識の学習は効力感に影響し、実践などを通じて、より子どもたちの発達を見越した遊びなどについて習得している可能性があるからである。

２. 研究方法

2.1　調査対象者

保育者養成短期大学に在籍する1年生104名及び2年生138名、合計242名を対象とした。なお、分析は回答を得られた中から、無記入などエラー値を排除した、1年生103名及び2年生116名とした。実習経験については、1年生は1度も経験がなく、2年生の学生は、教育･保育実習を､1人3回から4回の実習(1回あたり1週間から2週間)を経験している。

2.2　調査手順

両学年ともに、一斉型の記述調査を行った。十分に調査に関する説明を行い、同意を得た上で､「保育者効力感尺度」と「運動有能感」及び「運動遊びのレパートリー」について測定を行った。なお､「運動遊びのレパートリー」では遊びの幅が広いため、廃品で且つ容易に保育現場で使用できる「新聞紙」を題材にアンケートを行った。

2.3　調査の内容

調査内容は「保育者効力感尺度」と「運動有能感」に関する質問項目を採用した。回答はいずれも 5 件法とし、「まったく当てはまらない」は 1 点、「あまり当てはまらない」は 2 点、「どちらともいえない」は 3 点、「やや当てはまる」は 4 点、「よくあてはまる」は 5 点とした。

「保育者効力感尺度」は、保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらす保育的行為ができるという定義に基づいて作られた。この指標は実習において保育者としての意識の効果が図れるため、さまざまな場面で用いられている。今回は、学生が保育者として実践力や子どもに対して現場に即した応用力などについて測るためこの尺度を用いた。

「運動有能感尺度」は、岡沢ら（1996）は体育の授業において身体的有能さの認知だけでなく、内的な動機付けられることが高まることが重要な目標でもあることから、この尺度を作成した。運動に対する有能感は「運動ができる自信があるという有能感」と「練習すれば出来るようになるという統制感」と「運動場面では教師や仲間から受け入れられているという受容感」の 3 因子から成り立っている。及川（2014）や丸井ら（2015）は、保育学生が運動遊びの指導力向上において、身体的有能感と内的動機付けにも着目したこの尺度を有効だとして用いられている。

また、運動遊びのレパートリーとして、今回は自由記述のアンケートで、保育の道具を使った遊びの中から、箇条書きで「新聞紙遊び」を挙げた。本研究では、この箇条書きの項目数と内容について分析した。「新聞紙遊び」は、ものを扱う能力を育て、ケガをしにくく、形を変え、費用がかからない（赤堀・林、2018）とされる。保育の場での遊びの展開が、個人及び集団で活動するとき取り入れやすい道具として、新聞紙は使いやすい。素材が多様な性質を持っているのでさまざまな基本的動作や素材がシンプルなので手を加えたり、形を変えて幅広い用途に活用すること（江刺家・滝澤，2015）ができる。

2.4　データの分析

保育者効力感尺度と運動有能感尺度及び運動遊びのレパートリーについて、1 年生と 2 年生でデータをそれぞれの平均値を比較し、独立したサンプルでの t 検定を行った。統計的な有意水準は 5%に設定した。新聞紙遊びの自由記述は、カテゴリー化し、同類の遊びと判断できるものはまとめ、その出現回数を記録した。データの加工及び統計処理には IBM SPSS　Statistics25 を用いた。

3. 結果

3.1　保育者効力感の差異

1年生と2年生の保育者効力感についてt検定を行った。その結果、2群間に有意な差は認められなかった（図1)。つまり、1年生と2年生の保育者としての自信は専門的学びや実習を経験しても向上しないことを意味する。

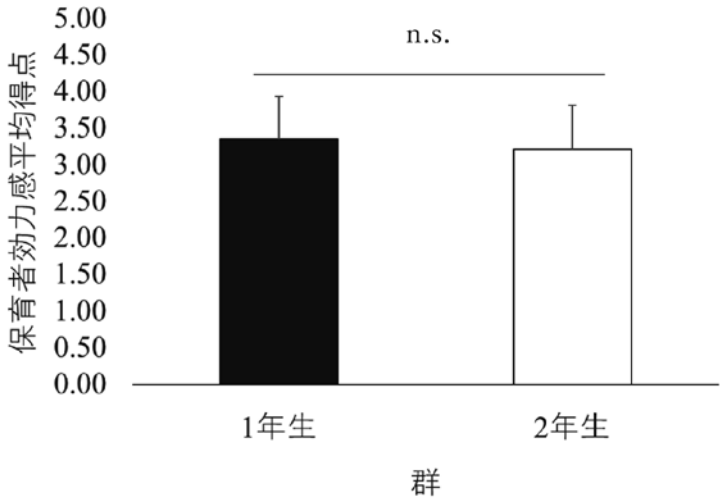

図 1. 保育者効力感の群間の差異

3.2　運動有能感の差異

1年生と2年生の運動有能感についてt検定を行った。その結果、2群間に有意な差は認められなかった（図2)。つまり、1年生と2年生の自己の運動に対する自信は専門的学びや実習を経験しても向上しないことを意味する。

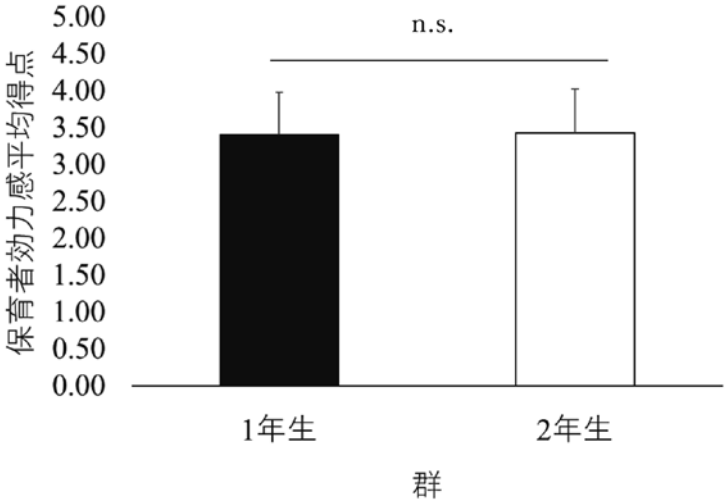

図２．運動有能感の群間の差異

3.3　運動レパートリーの差異

１年生と２年生の運動レパートリーについてχ２検定を行った。その結果、２群間に有意差が認められた（χ２ = 48. 32, df=9,p<.01；表1)。つまり、運動レパートリーは１年生よりも２年生の方が有意に多くの種類を回答したことを意味する。

表1．運動遊びのレパートリーの群間の差異

１年生の出現した運動遊のレパートリー	度数	%
チャンバラ	40	7.31
ボール	31	5.67
じゃんけん折りたたみ	23	4.20
剣	12	2.19
かぶと	11	2.01
ちぎる	10	1.83
小さめボールをつくる	9	1.65
何人乗るか	8	1.46
輪投げ（輪っか投げ）	8	1.46
やぶる	5	0.91
新聞紙をおなかに走る	5	0.91
ビリびりに引き裂く（降る・プール）	4	0.73
野球	4	0.73
大きい紙飛行機	4	0.73
大きい折り紙	4	0.73

２年生の出現した運動遊のレパートリー	度数	%
じゃんけん折りたたみ	70	12.80
チャンバラ	46	8.41
ビリびりに引き裂く（降る・プール）	44	8.04
ボール	42	7.68
輪投げ（輪っか投げ）	37	6.76
ちぎる	27	4.94
服を作る（変身する）	17	3.11
玉入れ	13	2.38
新聞紙をおなかに走る	13	2.38
剣	10	1.83
やぶる	9	1.65
ボール当て（的当て含み）	9	1.65
ボール運び	7	1.28
棒を作る	7	1.28
棒入替	6	1.10
かぶと	6	1.10
リレー	6	1.10

4．考察

本研究の目的は、保育者養成校に在籍する学生の在籍年数の差異が保育者効力感・運動有能感及び運動遊びのレパートリーの出現率に及ぼす影響について明らかにすることである。その結果、保育者効力感に2群間の差異は認められなかった。先行研究によると、実習前後の短期間の経験であっても保育者効力感が向上する傾向がある（三木･桜井, 1998）と述べている。しかしながら、本研究では、先行研究とは異なる結果であった。この点に関して、他の先行研究（小薗，2014）では、保育学生が実習などを経験しても自己に対する自信は向上しないが、保育のスキルに関する効力感は向上することが明らかとされている。また、専門的知識や実習などの実践を通して、自己が思っている以上に専門性が求められることや、入学時から専門職としての位置づけなどを理解したことで、不安傾向が高まった結果、保育者効力感は向上しなかったと推察される。

次に、自己の運動に対する運動有能感の向上についても2群間に差異は認められなかった。この結果は､これまでの運動経験の達成経験や社会的評価が影響していると思われる。この点に関して、杉原（1999）によると、運動有能感は、運動遊びや運動の達成経験とその社会的評価が影響しており、幼少期の影響が成人期にも及ぶことを示唆している。つまり、成人になってから、運動有能感を向上させることは容易ではないことを意味する。しかしながら､成人であっても､ある技能において､地道な練習を行い､これまでできなかったことができるようになると、その技能についての運動有能感は向上すると考えられる。保育者は日々、子どもとともに楽しむ運動遊びについて思考し、自ら実行していくことが必要と大切かと思われる。

次に、運動遊びのレパートリーについては、2群間に有意な差異が認められた。この結果は、先行研究（小薗，2014）の結果の一部と同様であった。小薗（2014）によると、保育のスキルについては、効力感が向上することを明らかとしている。つまり、専門的知識と実践を通じて、知識と実践が点で繋がったことや、実際の発育・発達を理解した上で、その子どもたちにあった遊びとは何かを理解できる学びの差異がこの結果に反映したと思われる。

5．まとめ

本研究の目的は、実習の経験が保育者効力感・運動有能感と運動遊びのレパートリーとの関連を検証した。

主な結果は以下のとおりである。

１．実習の経験の有無によって保育者効力感が上がり、子どもに対する自信があるかと考えられた。しかしながら本調査では実習の経験によって、保育者効力感の差異は認められなかった。これは、実習経験のある２年生は、保育者のスキルや子どもの前に立つ場面での経験不足の認識等から、実習未経験の１年生は、子どもとの関わりがないためなど理由については今後の検討課題としたい。しかし、運動遊びのレパートリーについては、１年生は、実習未経験のため子どもの運動遊びのイメージが描けないが、２年生は、保育者としての実践力は現場経験の数から成長過程であるため、子どもの運動遊びのイメージが想像できたためと考えられる。

２．保育学生としての運動有能感は実習の経験との関連は見られなかった。しかし運動に対して苦手意識をもつ保育者を少なくすることを目指す為に、運動有能感の変化について継続して調査し、運動遊びのレパートリーの関連については、今後の検討課題としたい。

３．学生は実習経験や学びの期間によってそのアイディアや発想力の量に差が認められた。実際に実習を通して子どもと接し、現場を踏むことによって、子どもの姿に合わせた展開力を身につけていると考えられる。実習では､成功体験だけでなく失敗を繰り返すが､その過程が糧となって発想力の源となると推測される。

６．今後の検討課題

1）今回は遊びのレパートリーとして、新聞遊びを取り上げたが、今後保育現場で使われる他の道具（段ボール・フープなど）のレパートリーについても併せて考える必要がある｡新聞紙遊びだけでなく身近にある素材や廃材など利用した遊びについても検討したい。

2）遊びのレパートリーを増やすには、先行研究や書籍より展開方法やアイディアが紹介されている。保育学生だけなく現場の保育者自身も、展開する力をつけると、指導力向上に繋がり、時間をかけて省察を重ねていくと保育者効力感が上がる可能性について研究をすすめていきたい。

3）本年度において学びの形態が、コロナ禍のため変化している。学外での実習に十分な時間が確保されないだけでなく、学内での実技科目も縮小傾向にある。今後は継続して学生の保育者効力感・運動有能感の変化を着目し、保育者に求められる運動遊びの指導する力の向上について授業を再検討し、さらに省察を重ねていきたい。

引用・参考文献

・日本発育発達学会編「幼児期運動指針実践ガイド」 2014　杏林書林

・幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領　2017

・砥堀雅信・土田了輔・永木耕介（1996）「幼児期における運動遊びと体育指導に関する一考察」上越教育大学研究紀要　15-2　pp.223-231

・穐丸武臣・三井淳藏（1998）「幼児の体力と運動能力の発達（1986 年と 1996 年の比較）日本体育学会大会号 49（0）pp.421

・居崎 時江（2008）「幼児の体力、運動指導に関する保育者の意識調査」発育発達研究 2008 巻 Supplement 号 pp.90

・細川賢司（2014）「保育中の運動遊びにおける保育者の関わりと幼児の運動量の関係」教育学論究　第 6 号 pp.209-220

・池田（尾畑）美鈴（2017）「幼児期における身体表現や運動あそびの指導課題に関する考察 - 各年齢児クラス担任の言述より－」東京成徳短期大学紀要　51　pp.1-11

・春日晃章編著　編集　松田繁樹・中野貴博・板谷厚・小栗和雄・門田理代子・河野隆・香村恵介・古賀範雄・酒井俊郎・田中浩子・出村友寛・中野裕史・野中壽子・桧垣淳子・平野朋枝・堀建治・水落洋志・山下普「新時代の保育双書　保育内容　健康［第 2 版］みらい社

・吉田伊津美編著「楽しく遊んで体づくり！幼児の運動遊び「幼児期運動指針」に沿って」チャイルド社 pp.11-22

・西坂小百合（2002）「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響」教育心理学研究，50，pp.283-290

・杉原隆・森司朗・吉田伊津美（2004）「幼児の運動能力発達の年次的推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析」文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書 pp.1-122

・三木知子・桜井茂男（1998）「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」教育心理学研究　46-2　pp.203-211

・神谷哲司（2009）「保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的変化－実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して－」 キャリア教育研究　28　pp.9-17

・森知子（2003）「保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連：保育者養成校における実習教育プログラムをとおして」臨床教育心理学研究 29（1）, pp.31-41

・吉村淳子・芝崎美和（2015）「保育者養成におけるピアノ指導について －学生の自己効力感に着目して－」 新美公立大学紀要　36　pp.59-66
・神谷哲司（2009）「保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的変化 - 実習時期と就職活動を通じた進路選択課程に着目して－」キャリア教育研究　28　pp.9
・市河勉・新戸信之・三浦累美・三宅孝昭（2017）「保育内容健康領域における保育者効力感の検討」 松山東雲短期大学紀要　48　pp.162 － 117
・岡沢祥訓・北　真佐美・諏訪祐一郎（1996）「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」 スポーツ教育学研究　16.2　pp.145-155
・岡沢祥訓・木谷博記・木谷真佐美（2001）「小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成」　奈良教育大学紀要　人文・社会科学　50.　pp.91-95
・吉井健人・大友　智・深田直宏・梅垣明美・南島永衣子・植田憲嗣・友草司・宮尾夏姫（2017）「体育授業における性差及び運動領域からみた運動有能感の検討：小学校 3 年生児童を対象として」立命館教職教育研究 4　pp.43-50
・丸井一誠･井邑智哉(2015)「女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果―運動有能感に着目して―　金沢青陵大学　人間科学研究　9　第 1 号　pp.31-34
・日比健人（2019）「保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について」 夙川学院短期大学研究紀要　46.　pp.37-48
・中曽根裕（2018）「保育士の身体有能さの認知と運動遊びの関連性」 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集　19　pp.155-164
・及川直樹（2014）「女子短期大学生の運動有能感の実態と関連要因の検討－身体的有能さの認知と受容感に着目して -」飯田女子短期大学紀要　31　pp.145-152
・赤堀達也・林周子（2018）「新聞紙を使った幼児の運動遊びの考察 - コーディネーション理論を応用して -」 小田原短期大学研究紀要　48　pp.155-162
・江刺家由子・滝澤真毅（2015）「幼児への運動遊びの指導－新聞紙を使った活動を例として -」帯広大谷短期大学紀要　52　pp.11-18
・小薗江幸子（2014）「保育実習が学生の自己効力感に与える影響―実習回数の違いによる自己効力感の特徴―」淑徳短期大学研究紀要第 53 号，pp.97-112
・杉原隆（1999）「保育内容健康　パーソナリティの発達と運動」健帛社

The Effect of Differences in the Number of Years of Enrollment of Students Enrolled in Pre-School Teacher-Efficacy and Physical Competence of Childcare Workers and the Appearance Rate of the Repertoire of Exercise Play

Kikuchi, Rie*

本研究は、保育者養成の学生が、実習経験によって保育者効力感及び運動有能感、運動遊びのレパートリーについて変化するのか検討した。これらの検討については実習経験のある2年生と実習経験のない1年生と比較した。分析の結果、保育者有能感にも、運動有能感においても有意な差は見られなかった。運動遊びのレパートリーは、新聞紙を扱った遊びを自由記述にて回答を得た結果、実習経験のある2年生の方がより多くの遊びの記述がされた。つまり学生は実習経験や学びの期間によってそのアイディアや発想力の量に差が認められた。実習では、成功体験だけでなく失敗を繰り返すが、その過程が糧となって発想力の源となると推測される。

キーワード：保育者効力感，運動有能感，運動レパートリー，実習

**Nagoya Ryujo Junior College*